

保育者養成校の学生における幼稚園での観察を通じた学び：
幼児の子ども同士のかかわりや保育者とのかかわりに注目して

津 々 清 美

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第65号抜刷）

保育者養成校の学生における幼稚園での観察を通した学び： 幼児の子ども同士のかかわりや保育者とのかかわりに注目して

Learning in Students of the Childcare Teacher Training School through Observation at the Preschool:
Focusing on Relations between Preschoolers or Preschoolers and Teachers

津々清美

キーワード：保育 人間関係 幼児理解 保育者の援助と配慮

1. はじめに

幼児期は、これまでの家庭における親しい人間関係を基盤としながら、保育者や他の幼児との関わりを広げ、そこでの様々な体験や経験を通して社会性を獲得していく時期である（文部科学省，2018）。保育者にはこのような幼児期の発達過程を考慮しつつ、目の前の子どもの姿を適切に捉え、その子どもの将来への見通しをもって、生涯にわたる人格（人間）形成の基礎を培うための保育を展開していくことが求められる（文部科学省，2018；厚生労働省編，2018；内閣府・文部科学省・厚生労働省，2018）。

幼児期にふさわしい保育を展開していくために、保育者は、今、目の前の幼児が「遊びや生活といった直接的・具体的な体験を通して、どのように人とかかわる力や思考力、感性や表現する力など」（文部科学省，2018，p.27）を身につけているのかを、より具体的に捉えていくことが重要となる。また、保育者自身がどのような思い（願い）をもち、幼児とかかわっているのか、日々の自身の保育を省察し、修正していくことも重要である。

保育者養成校にあっては、上記のような幼児期にふさわしい保育を展開していくことができるよう、保育者に求められる資質や能力の基礎を身につけるためのカリキュラムが設定され授業が実施されている。しか

し、幼児が保育所や幼稚園等で具体的にどのようなように他者とかかわり上記のような力を身につけているのか、そのために保育者がどのようなかかわりを行っているのかを学生達がまざまざと思い浮かべるには経験の少なさも相まって多少なりとも難しい面があると思われる。また他者とかかわりにはそれぞれの思いが存在し、保育所や幼稚園等で日々起こる意図的・偶発的な出来事は多種多様であり、そこで生じる思いはその人物の特性やその人物のこれまでの経験等によって異なる。日々の出来事を通して生じる個々人の思いは現在進行形で絶えず変化したり、時にはしばらくその思いが継続したりするものである。それゆえ子どもや保育者がなぜそのような言動をしたのか、その背後にある思いを推測して幼児理解へと繋げていくには、幼児期の発達過程を考慮しつつも、日々の幼稚園生活をどのように子どもや保育者が送っているのかを直接観察することで個々人の思いを推測していくことも大切であるように思われる。

そのような人との関係の中で起こる自分や他者の思いを感じとり、子ども理解や自身の保育観を省察したりするためのエピソード記述が近年注目されている。保育者養成校においても、実習や教育・保育に関係する授業の中で学生達のエピソード記述を事例として検討・考察した研究が行われている（e.g., 田尻・西口，2013；五十嵐，2017；渡邊・青木，2018）。

本稿の目的 そこで本稿では心理学に関係する授業（以下、本授業とする）の中で実施された、幼稚園での人間関係に係る出来事を観察して、将来保育者を目指す学生達が目の前で展開される保育の出来事から、どのようなことを感じたり学びとったりしたのか、学生達のエピソード記述をもとに著者がその場面の概要を記し、学生達の考察を記述する。そしてこれらについて著者がコメントを付し、学生達の考えについて考察する。

本授業は、子ども同士や子どもと保育者のやりとりを学生が観察し、その関係の中で生じる思いやその原因などを読みとって推測したときに、他の可能性も考えられることや、1回の観察だけから気持ち等を決めつけてしまうのではなく、その後の様子などを見ながら自身の考えを修正していくことなどの理解を促すことも目指していた。そのため下記の「2. 本授業の概要」で示すように、自身がまとめたエピソード記述を他の学生と共有し、話し合ったりすることも本授業の内容に含まれている。本稿は学生の観察した出来事や学生の考えについて考察することを通して、本授業を改善していくことも目的とした。

また学生達が観察した出来事が、幼稚園教育要領解説（文部科学省、2018）のどの部分と関連するかを示す試みを行う。それによって、将来保育者を目指す学生達への一つの指針となることを目指していく。

2. 本授業の概要

以下に本授業の概要を記す。

2-1. 本授業の目的

本授業は、幼児理解のための観察方法や記録方法を身につけ、幼児の心身の発達過程や幼児の姿を考慮した援助方法を考える基礎を培っていくことを目標とした授業科目である。

2-2. 受講者数

小学校、幼稚園教諭および保育士養成校の4年制大

学に所属する3年生計49名（男性6名、女性43名）が本科目を履修した。本授業は、保育士資格取得において必須の科目と位置づけられており、履修者の大半が将来保育者を目指している学生であった。

2-3. 本授業の構成

本授業は、大きく以下の八つで構成されていた。以下に授業内容を示す。

①**発達段階に応じた乳幼児の心身の発達の確認** これまでに学んできた乳幼児の心身の発達特色に関する内容について、2年前期の心理学に関係する授業で学んだ内容を振り返った。

②**幼児理解のための記録方法** 子どもや保育者の心が動いた場面を取り上げて幼児理解を深めたり、保育者の援助と配慮を省察したり、自身の保育観などを振り返ったりするための記録方法として、エピソード記述（e.g., 鯨岡, 2015）やドキュメンテーション（e.g., 白石, 2018）があることの説明を受けた。またそれらの具体的な記録の仕方について、授業担当者より説明を受けた。その後、映像視聴によりエピソード記述の作成を試みた。

③**観察の仕方** 幼児役・観察者役になり、模擬実践を行うことにより、実際に幼稚園にて観察する際の観察者の立ち位置、観察の視点、記録の仕方等について配慮すべき事項を確認した。

④**幼稚園での直接観察** 幼稚園に行き配属先のクラスの幼児・保育者の観察・記録を実施した。その後、時系列に沿って幼児の活動や教師の援助・配慮等について観察記録を行った。

⑤**エピソード記述の作成と討議** 観察時に観察者の心が動いた出来事を中心に、自身の観察記録を参考にしながら、背景、具体的なエピソード内容、考察の三つの構成から成るエピソード記述（鯨岡, 2015）を行った。また、自身が取り上げたエピソードに関して他の学生とエピソードを共有し、なぜ幼児や保育者がそのような行動をとったのか、遊びや生活からどのような学びへと繋がっているのか、自身が保育者だったらどのように行動するかなどの討議を行った。

⑥ドキュメンテーションの作成と討議 観察時での記録をもとに幼児の活動や保育者の援助・配慮を振り返り、園での様子を伝えるためのドキュメンテーション（白石，2018）をパワーポイントにより作成した。また、それらの内容を他の履修者と共有するため、グループ発表を実施した。

⑦保護者への援助方法 映像視聴により、自身が保育者だったらどのように保護者に対応するかを考え、ロールプレイを実施した。

⑧本授業のまとめ 本授業を履修する前と履修した後で、どのような学びがあったかをグループで振り返ると共に、各自での振り返りも行った。

3. 幼稚園での観察における学生の学びとそれに対する著者のコメント

以下では、上記の「2-3. 本授業の構成」で示した④幼稚園での直接観察から⑤エピソード記述の作成と討議に関わる内容について示す。ここでは、幼稚園において、しばしばあるいは少なくとも時折起こる人間関係に係る出来事について、学生達がそれらの出来事を観察したときにどのようなことを感じとったり考えたりしたのかを検討する。従って、本稿では、病気や障害または問題行動などに関わる特別な事例ではなく、保育・幼児教育の現場で一般的に出会うような出来事について、学生が注目して考察を行った出来事を六つ取り上げる。以下では、それらの場面が大体どのようなものかについて、著者が作成した概要を最初に述べ、その後学生が行った考察を記した。

インフォームドコンセントは、学生達の“考え”について検討または文章化して公表してよいかという内容を中心として、幼稚園の園長および該当学生に文書および口頭で説明し、書面による同意を得た。ただし、学生個人毎のインフォームドコンセントでは、“何を考えたか”について検討・文章化することへの同意となっていたので、そのような場面に対して学生達がどのようなことを感じとったり学びとったりしたのかの記述は、各自が書いた文章そのものを使わず、学生

達の考察で書かれた内容を変えずに著者が文章化したものを「学生の考察」の部分に示した。このようにして、文章そのものから個人を特定できないように配慮した。さらに学生達の観察・エピソード記述を通して学生達がどのように考えたり学びとったりしたのか学生達の考えに対する考察は「著者のコメント」で示した。

このように、本稿では学生達が記したことの詳細を記載する必要はなく、一般的に観察されるような、あるタイプの出来事としてその概要を記したものであり、その各々について学生達が何を考えたかを考察したのものとなっている。

また本稿は、研究倫理審査委員会の承認を受けた。

3-1. 身の回りの始末に時間を要する場面

概要 子ども達は登園した後、まず自分のクラスで持ち物や身の回りの始末を行い、それから自分で選んだ好きな遊びを友達や仲間と思い思いに始める。そのような中で持ち物の始末に時間を要する子どもがいることは園生活ではよくあることである。

学生の考察 このような場面について、学生は身の回りの始末を保育者が直接手助けする代わりに、子どもに声をかけて行動を促したり、傍に行き子どもの気持ちを尋ねたりするなどの援助を行っていることを学んでいた。また保育者の援助によって子どもの表情や行動が変化する様子も読みとっていた。

また1回目の観察時でも同様の場面がみられたことから、子どもの性格に関する推測を考察で行っていた。そして出来事の開始から終了まで保育者が直接手助けするような場面が見られなかったことから、“身の回りの始末を自分でできるようになってほしい”という保育者の強い思い（願い）を感じとっていた。学生はこのような場面から、子ども自身で身の回りの始末ができるように声をかけたり傍に行き気持ちを聞いたりした保育者の一連の援助により、最終的に子どもが自分で身の回りの始末をすることができ、さらにそれによって遊んでいる友達の中に自分から入っていくことができたのではないかと考察を行っていた。

著者のコメント 4月の入園間もない時期では、子ども達は持ち物や身の回りの始末をするにしてもかなりの時間を要する。それは園での過ごし方に慣れていないことや、手指の巧緻性のぎこちなさ、また家庭という親しい人から離れ、初めての集団生活を過ごすことへの不安な気持ちなど多くの背景を含んでいる。保育者は子どもの発達過程を考慮しながら、一人ひとりの子どもの気持ちに寄り添い、時に持ち物の始末を直接手助けしたり、賞賛したり、励ましたり、あるいは時に遠くから見守ったりなどしながら次第に子どもが自身で身の回りの始末ができるように促していく。

子ども達が園生活に慣れた時期においても、その子どもの性格特性や登園前の家庭での体験、また登園後のクラスでの過ごし方によって自分で身の回りの始末がスムーズにできる日もあれば、そうでない日も園生活ではよくある。そのような登園後の身の回りの始末に時間を要した子どもと保育者のかかわりから、学生は子どもと保育者の様子を詳細に記録し、そこから特に保育者の思い(願い)を感じとっていた。

一方、子どもに焦点を当ててみるとどうだろうか。学生は子どもの性格特性を挙げていたが、それ以外の視点からも子どもの思いを読みとることができるように思われる。学生は、保育者から身の周りの始末をして外遊びに行こうと誘われた直後の子どもの様子について、保育者から外遊びに誘われて表情が嬉しさへと変化する様子を読みとっている一方で、その直後であっても一向に身の回りの始末が進まない、あるいはむしろ更に時間をかけて身の回りの始末を行う子どもの様子に気づいていた。このような子どもの様子に焦点を当てて子どもの思いを考えるならば、子どもの性格特性だけではないことにも目を向けることができたように思われる。そこには“保育者のかかわりや注意を得たい”という子どもの思いが隠されていたのではなかろうか。

また、その後、一向に身の回りの始末が進まないため、保育者が子どもを気に留めつつ外に出ようとする子どもが悲しくなる様子にも学生は気づいていた。このような子どもの反応に注意を向けてみると、そこ

にはこれ以上身の回りの始末に時間をかけてしまうと、保育者が外に出てしまって“保育者の注意が自分に向けられなくなってしまう”ことや“保育室に一人になってしまう”ことに“寂しさ”や“悲しさ”を感じている子どもの思いが推測できるのではなかろうか。

上記のようなことから改めて考えると、学生が観察した出来事は、保育者の子どもに対する“自分で身の回りの始末ができるようになってほしい”という思い(願い)と、子どもが保育者に対して“もっと保育者のかかわりや注意を得たい”という思いが静かにぶつかり合う場面にも感じとれ、その双方の思いや願いのかけひきが展開された場面であるとも感じとれる。

幼稚園教育要領解説(文部科学省, 2018)では、「幼児期は、次第に自分でやりたいという意識が強くなる一方で、信頼できる保護者や教師などの大人にまだ依存していたいという気持ちも強く残っている時期」(文部科学省, 2018, p.16)であり、「大人への依存を基盤として自立に向かう時期である」(文部科学省, 2018, p.16)とある。学生が経験した出来事は親しい大人、つまり保育者に依存していたいという気持ちを示した一つの場面であるように思われる。そして、その子どもに対する保育者の行動やその背後の思いは子どもの気持ちを受け止めつつ、“自分で身の回りのことができる”よう子どもの自立性を促そうとした場面と言えるのではなかろうか。日々の園生活ではこのように子どもと保育者の思いが絶えず行き交いながら保育が展開されていると言えよう。

3-2. 他者の思いに気づき、他者を思いやる場面

概要 園から別の場所に歩いて移動する最中、子どもの中には躓いて転んでしまったり、集団から遅れ始めたりすることはよくある。そのようなときに、困っている友達に気づいて駆け寄り、大丈夫と声をかけたり、手をつないで一緒に行こうと誘ったりする子ども達の姿が見られる。

学生の考察 このような出来事を観察した学生は、年齢的にまだ自己中心的に考えてしまう傾向がある中で、自分以外の人に優しくする思いやりの心と気づく

力が育っていることを子ども同士のやりとりから感じとっていた。

著者のコメント 子どもが相手の思いに気づき優しい言葉や思いやりの行動をとるときには、相手が何らかの反応を表しているときであると思われる。例えば、集団から遅れ始めながらも何とか前方に歩いている友達に追いつこうとして一生懸命歩いている場面を見たときには、その行動から“前方に追いつこうと一生懸命歩いているのだ”と、その相手の思いを感じとれることが必要となる。また相手が躓いてこけてしまっていて泣いている場面では、泣いているという表情や言葉から“痛くて泣いているのだ”という相手の思いに気づくことが必要である。学生が観察したような出来事は幼児がそのような相手の行動から思いを感じとり、相手に優しい言葉をかけた子どもの姿であった。

このような出来事は、日々のほんのちょっとしたものではあるが、そのようなちょっとした出来事を子ども達が日々の園生活を通して積み重ねていくことにより次第に他者の思いに「気づき」、他者への「思いやり」を深めていくのだと思われる。

幼稚園教育要領解説（文部科学省，2018）では、友達と「相互に関わることを通して、幼児は自己の存在感を確認し、自己と他者との違いに気づき、他者への思いやりを深め、集団への参加意欲を高め、自律性を身につけていく。」（文部科学省，2018，p.34）とあり、学生が観察を通して感じとったことは「他者への思いやり」に関係する一つの場面と言えるだろう。

日々の園生活におけるちょっとした出来事であるが、しかしそのような出来事が頻繁に起こり、子ども達がそのような出来事を通して相手を思いやる力を獲得していつているのだと考えると、このような日々のちょっとした子ども同士のやりとりにも目を向けて子ども同士の思いを感じとることも将来保育者になる上で大切なことのように思われる。

3-3. 遊びを通して適切な言葉を学ぶ場面

概要 保育者がおもちゃを両手のどちらか一方に握って子ども達に見せ、どちらの手におもちゃが入っ

ているか子ども達が予想する遊びをすることはよくあることである。このような保育者が展開する遊びの場面において、子どもが間違えた言葉を使用したときには保育者が適切な言葉を子ども達に伝える場合もある。

学生の考察 学生はこのような場面を観察し、保育者が遊びを通して正しい言葉を子ども達に伝えていることを学びとっていた。しかも子どもが間違えた言葉を使ったときに単に“違う”とだけ伝えるのではなく、具体的にどのような場面のときどういう言葉を使用するのが適切であるのかを子ども達に伝えることが子どもの言葉の獲得において重要であることを学びとっていた。さらに子ども達に教える大人側の私達も、しっかりと正しい言葉を使っていかなければならないとし、自分自身の言葉遣いを見つめ直していきたいとの考えを述べていた。

著者のコメント 幼稚園教育要領解説（文部科学省，2018）では、「言葉は、身近な人との関わりを通して次第に獲得されるものである。」（文部科学省，2018，p.213）とあり、子ども達は保育者という身近な人との関わりによって適切な言葉を獲得したのだと思われる。このような出来事は保育内容「言葉」の「(5)生活の中で必要な言葉が分かり、使う。」（文部科学省，2018，p.219）に関連する場面であり、保育者が「幼児の生活に沿いながらその意味や使い方をその都度具体的にわかるように伝えていくこと」（文部科学省，2018，p.219）に該当する場面のように思われる。

3-4. 遊具を巡る子ども同士での葛藤解決場面

概要 遊具で遊びたくてもなかなか交代を言い出せないでその遊具が空くのじっと待っている子どもがいたり、後から来た子どもに代わってと言われて抵抗や拒否をしたりする場面も園生活ではよく見られることである。

学生の考察 学生は遊具を代わってと言われてもしばらく遊具を手放そうとしなかった子どもの様子をよく観察しており、その時の反応から“他の場所が空いているのに、なぜ私に代わってと言うのか分からな

かったのだと思う”とその子どもの思いを感じとっていた。また代わってほしい理由を追加して再度子どもが他児に代わってと伝えた様子から、遊具など何か相手をお願いをする時には、何故そうしてほしいのか理由もしっかりと伝えることが大切であるということを知り、そしてこのような遊具を巡る葛藤場面について、理由を付け加えて再度お願いをしたことで交代をお願いされた子どもが自分の気持ちと他者の気持ちに折り合いをつけることができたのだと思うとの考察を行っていた。

著者のコメント 学生は、遊具を代わってほしいと言われたときに、交代をお願いされた子どもが動かずにじっとしていた様子に注目し、その子どもの思いを感じとっていた。それは他の遊具が空いているにもかかわらず私に代わってと言うのか分からず“困惑した”という子どもの姿であった。学生が考察したような困惑の思いとともに、ここにはその他の思いも入り混じっていたのではないと思われる。それは“もっとこの遊具で遊んでいたい”という気持ちや、遊具を“譲りたくない”という気持ちである。そして子どもが何も言わずにじっとしたままの状態は、“何も言わない”、“その場から動かない”ことにより自身の気持ちを相手に示している姿と予測でき、このような態度は一つの自己主張を表しているものと推測される。

一方、交代を求めた子どもの言動からどのようなことが読みとれるだろうか。交代を求めた子どもが最初に申し出た言葉は単に代わるように求めるだけであったのに対し、2回目の申し出ではなぜ交代してほしいのかその理由を付け加えた言葉であった。このように同じ交代の申し出であっても子どもがどのように言葉を言い換えたかに注目することで子どもの思考状態を推測することができるように思われる。1回目に交代を求めたときは相手が動かずに黙ったままの状態であったことから、交代を申し出た子どもは相手の困惑や拒否を敏感に感じとったのではないと思われる。それによって言葉の言い換えが行われたのではないかと推測される。言葉の言い換えが行われたことによって、学生が考察したように、交代を求められた子ども

は納得して交代をすることができたのだと思われる。

幼稚園教育要領解説（文部科学省，2018）では「幼稚園における集団での遊びの中では、相手にこうしてほしいという場面がよくある。しかし、相手にこのような願いを抱いたときも、それを一方的に要求しても受け入れられないことがある。」（文部科学省，2018，p.217）とあり、交代を要求しても相手が動こうとしなかったり、黙ったままの状態であったりする場面は、その要求が受け入れられないことをそのような態度で表しているのだと思われる。そして、このような反応から「相手の思っていること」（文部科学省，2018，p.174）に気が付き、「自分のしたいこと、相手にしてほしいこと」の言葉による伝え方や、相手の合意を得ることの必要性」（文部科学省，2018，p.217）を日々の他者とのやりとりの中で子ども達は学んでいく。そしてそのようなやりとりを経験することでどのように言えば相手に自身の思いが伝わるのかを子どもは学びとり、「伝える相手や状況に応じて、言葉の使い方や表現の仕方を変え」（文部科学省，2018，p.70）ていくようになるのだと思われる。子どもが最初の言葉を言い換えて理由を付け加えて再度相手をお願いするような場面はまさにこのことに該当するように思われる。また学生が観察した場面は、相手に自分の思いを率直に伝えるだけでなく、その理由も付け加えて相手に伝えることが葛藤場面を自分達で解決する一つの方法となりうることを示唆しているように思われる。

3-5. 遊具を巡る保育者の介入による葛藤解決場面

概要 上記の3-4のような場面とは異なり、時には子ども達同士で折り合いをつけたり、解決したりすることが難しい場面もある。

学生の考察 そのような互いの思いが対立する場面から、保育者による援助によって解決へと向かう場面を学生は観察していた。そして学生は保育者の一言でその後の展開がガラリと変わることを感じとっており、保育者の援助が子ども同士のその後のやりとりに影響することを学びとっていた。また最終的に、子ども達同士で折り合いをつけることができたのは、普段

の園生活の中で、子ども達と保育者との関係が築かれていたからだとの考察を行っていた。

著者のコメント 保育者のかかわりが子ども達のその後の活動に大きく影響することを学生は感じとっていた。また、円滑な解決へと展開するには保育者と子どもの信頼関係が必要であることをも学びとっていた。このような場面について学生は保育者の介入に注目して保育者の援助について考察していたが、保育者が直接声をかけて援助した場面以外にも保育者の配慮はあったのではないかと推測される。

例えば、遊具を先占している子ども達に他の子ども達が「ザワザワとした園庭でも聞こえるくらいの大きさ」で、「代わって」と言ってきたことから、交代を要求した子ども達の声はかなりの声量であったと推測できよう。そしてその声の大きさからおそらく保育者にもその声は届いていたのだと思われる。しかし、互いの思いが対立して平行状態が続くまで保育者の介入は行われなかった。このことを考慮すると、子ども達のやりとりで気づきながらも保育者はあえてすぐには介入せず、しばらくその様子を遠くから見守っていたのではないかと推測できよう。もしそうであれば、気づきながらもあえて介入しなかった保育者の思いがそこに読みとれるように思われる。それは“子ども達同士で解決できるようになってほしい”という保育者の思い（願い）である。保育者は子ども達が自分たちで解決できることを願って子ども達のやりとりを見守りつつ、それが難しいときに保育者自身が介入して解決を促そうとしていたのではなからうか。

一方、子ども達同士のやりとりからはどのような子ども達の思いが感じとれるだろうか。「ザワザワとした園庭でも聞こえるくらいの声の大きさ」であったことから、交代を申し出てきた子ども達の“遊具を使って遊びたい”という気持ちは強かったように思われる。一方、遊具を先占していた子ども達も遊具を手放すことなく黙った状態であったことから、こちらも“遊具を使ってまだ遊んでいたい”という強い思いを抱いていたと推測される。交代を求めてきた子ども達がとった言動が言葉による明示的な自己主張であった

のに対し、最初に遊具を先占していた子ども達がとった言動は無言による抵抗を示すものであり、言葉によらない自己主張であった。このように、どちらも自己主張という点では同じであるが、自身の思いや考えを示す態度は状況によって異なることが分かる。

また遊具を先占していた子ども達の黙ったままの状態は、抵抗や拒否の表れとともに、自身の思いや考えを巡らせていた状態とも推測することができよう。

幼稚園教育要領解説（文部科学省、2018）では幼児期は「友達との間で物を巡る対立や思いの相違による葛藤が起こりやすい。」（文部科学省、2018、p.47）とされており、このような出来事はその一例を示したものであると思われる。そしてこのような対立や葛藤を通して「相手の気持ちに気づいたり自分の思いを相手に分かってもらうために伝えることの大切さを学んでいく」（文部科学省、2018、p.47）。このことから、子ども達が他者に対してとる“黙ったままの状態”は、どのように相手に伝えるかを考えていた時間であると考え、そのような状態もその後の子どもの成長にとって大切な時間であると言えるのではなからうか。

また遊具を貸してと相手に伝えたことは自分の思いを相手に言葉で伝えることの表れであり、保育者の介入により遊具を貸してあげた子ども達の行動は“まだ乗っていたい”という「自分の感情を抑え」（文部科学省、2018、p.47）た心の動きであったと思われる。

そして「教師は、幼児一人一人の発達に応じて、相手がどのような気持ちなのか、あるいは自分がどのようにすればよいのかを体験を通して考えたり」（文部科学省、2018、p.47）できるよう保育者は援助することとあり、平行状態のときに保育者が子ども達に声をかけたのはこの部分に関する援助であったと思われる。

3-6. 互いの現実と想像が異なる場面

概要 おままごとや戦隊ヒーローごっこなど、子ども達は本物が目の前になくてもそれらを別の何かに見立てながら、見立て遊びやごっこ遊びをして遊んでいる。一人で遊んでいるときはイメージの共有は必要と

されないが、複数の友達とごっこ遊びをする場合はイメージの共有が必要となり、子ども達は遊びを展開していく中で絶えず相互のイメージを確認したり修正したりしながら遊んでいる。

学生の考察 そのような遊びを行っている場面を観察した学生は、複数の子ども達と同じ遊びをしているようで全く違う想像を頭の中に膨らませながら遊びが行われていたことを学びとっていた。またごっこ遊びやふり遊びをしている中でも、子ども達が現実と想像の区別をしている場合があることを感じとっていた。

著者のコメント 学生は最初の子ども達の様子から、遊びに参加していた全員が気持ち悪い生き物をイメージしてそれを退治しようとしている様子を見てとっていた。学生はそのときの子ども達を“まるでヒーローにでもなったかのように”だったと感じとっており、“まるで容赦はしないぞと言っているかのよう”であったとしている。

しばらくして子ども達の中からその気持ち悪い生き物を材料として“まるで料理番組に出てくる料理人や料理研究家になったつもりで”そのお菓子を作り始めたことを感じとっていた。学生は、このような遊びに参加していた子ども達が、一方では悪者をやっつけるヒーローごっこを展開しており、他方では気持ち悪い生き物が入ったお菓子作りを展開している様子を行動から読みとっていた。そして、子ども達が同じような遊びをしているも頭の中で想像していることが異なる場合があることを学びとっていた。

また学生は気持ち悪い生き物を材料としてお菓子を作っていた子どもがヒーローごっこをしている他の子ども達に手渡す様子を見てとり、このとき手渡された子ども達の反応から若干間が生じたことを感じとっていた。この“間”から学生は、子ども達が現実と想像を区別しているからではないかと考察を行った。

では、学生が考察した「現実と想像の区別」とは具体的にどのようなことなのだろうか。ここに注目して考えると、子ども達が普段の日常生活でその生き物に対してどのように認識しているか、想像世界ではどのように振る舞うべきであるかといった現実・想像世界

での子ども達の捉え方が読みとれるように思われる。

“若干間があった”ということは、子ども達が気持ち悪い生き物が入った（想像上の）お菓子を手渡されて“戸惑った”と解釈できるように思われる。ではなぜ子ども達はこのとき戸惑ったのだろうか。それはその生き物に対して子ども達が普段の日常生活において、“汚い”“気持ち悪い”生き物であり、“食べる対象ではないもの”として認識していたからではなからうか。

幼稚園教育要領解説では、「幼児は、生活の中で感じたことや考えたことを様々に表現しようとする。その姿は、その幼児がこれまで家庭や幼稚園の生活の中で体験したことを再現したり楽しんだり、友達や教師に伝えようとしたり、さらに、工夫を重ねてイメージを広げたりするもので、その幼児の生活経験によって様々である。」（文部科学省、2018、p.246）とあり、幼児が行うごっこ遊びは生活の中で体験したことを再現したものであると言える。このことから、子ども達が見立てていた生き物は、普段の生活の中で私達大人が子ども達の目の前で“汚い”“気持ち悪い”“食べるべき対象ではない”ものとして認識しており、そのような認識の下でその生き物を退治するような言動をしているからであろう。つまり、子ども達は大人の日々の振る舞いを見ており、それによって身の回りのものを認識していると言えよう。

一方、想像の世界では、例えばおままごと遊びで登場するように泥団子をお団子に見立てて遊ぶことがあり、手渡された子ども達は泥団子をパクパクと食べるふりをする。そのため学生が観察した子ども達の想像世界では、気持ち悪い生き物が入ったお菓子を受け取って食べるふりをするのが適切な振る舞いと判断される。

このように、子ども達は現実世界では気持ち悪い生き物に対して“汚い”“気持ち悪い”生き物であり、食べる対象ではないものとして認識しているのに対し、想像世界では気持ち悪い生き物が入ったお菓子を食べるふりをするのが求められる。つまり、現実世界では“食べない”のに、想像世界では“食べる（ふ

りをする事)”が求められ、この行動自体は矛盾しているという状況である。この矛盾状態が生じたことにより、食べるべきものではない(食べたくない)が、食べるふりをしなければならぬという葛藤状態がこの若干生じた間に表れたと言えよう。

結果的に戸惑いが生じつつも気持ち悪い生き物が入ったお菓子を手渡された子ども達は、そのお菓子を食べるふりをした。では子ども達はなぜ戸惑いながらも食べるふりをしたのだろうか。それは、今、自分たちがしている遊びはあくまでも想像の世界(ごっこ)での出来事なのだから手渡してきた友達の嬉しそうな気持ちを現実世界での認識を持ってきて台無しにはいけないといった気持ちが働いたからではないだろうか。もしそうだとすれば、子ども達が想像と現実の世界を区別しながらも、同じ空間を共にしている、あるいは一緒に遊んでいる相手の気持ちを慮って振る舞うことが可能であることを示唆しているように思われる。

4. 総括

本稿は、心理学に関係する授業で実施した幼稚園での人間関係に係る観察を通して学生達がどのようなことを感じとったり学びとったりしたのかを考察することを目的とした。

学生達は幼稚園での非参与観察を通して記録する方法や、幼児や保育者の行動・反応からその内面を読みとる難しさ、他の学生との捉え方の違いにより気づくことができたようである。また、日々の記録や省察から次の保育計画に繋げていくことの大切さや、記録をもとに自身の保育観や保育実践を見つめ直していくことの大切さを感じていた。しかし、どうしてそのような言動を子どもや保育者がとったのかに関しては個人差があり、今後そのあたりの読みとりや考察についてもう少し深めていく必要があるように思われる。

本稿では学生達が観察した場面の概要を示し、それに対して著者のコメントを付した。これらは学生が経験したものをさらに著者個人の視点で考察したもので

ある。そこには当然のことではあるが著者とはまた違った捉え方や感じ方があるのは言うまでもない。本稿で示した著者のコメントは一つの捉え方であるが、これらを通して“一つの同じように見える行動や反応”であっても、それを引き起こす可能性のあるものは複数あり、それらの中のどれが強く影響してそのような行動や反応が生じたのかを確定することは容易ではないことに気づくことが重要である。なぜなら、いくつかの可能性を想定できれば、その後の対応や観察を通して絞り込んでいくことができるが、一つの思いつきでそれが確実であると思いついてしまうと、その後の観察等もそれに適合するような出来事ばかりが目に残ってしまい、固定した見方で他者を捉えてしまいかねない危険性をはらんでいるからである。

保育者養成校の学生達がこれから幼稚園教育要領や保育所保育指針を通して学んだり、あるいは実習等で直接保育にかかわったりするとき、学生の考察や著者のコメントは一つの指針として参考になり、それによって学生達が自分の考えを深めたり、あるいは他の視点を読みとったり、批判的に推測したりすることが可能になるように思われる。そしてこれらのことにより多様な可能性を思いつくことができるようになってくるように思われる。今後学生達が想定できる仮説を多様で豊かなものにしていくことも、演習としての本授業で重視したいことであった。

本稿では、履修者全員がどのような観察の視点を持ち、それらの視点に対してどのような考察を行っているのかを量的にまとめていくことができなかった。そのため今後、量的にまとめていくための検討をしていく必要もあると思われる。またそれによって学生達の視点と現役の保育者の視点の類似性や相違性を示していくことも可能になるのではないかとと思われる。現役保育者の出来事に対する主観的な捉え方と保育者を目指す学生達の出来事に対する主観的な捉え方の相違を検討することができれば、双方共に新たな気づきを得て、今後、自身の保育を見つめ直したり、発展させたりしていくことができるようになると思われる。

5. 引用文献

- 五十嵐沙織 (2017). 保育実習におけるエピソード記述を通した子ども理解 信州豊南短期大学紀要, 34, 99-117.
- 鯨岡峻 (2005). エピソード記述入門 実践と質的研究のために 東京大学出版会
- 厚生労働省編 (2018). 保育所保育指針解説 フレーベル館
- 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説 フレーベル館
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018). 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 フレーベル館
- 白石淑江編著 (2018). スウェーデンに学ぶドキュメンテーションの活用 子どもから出発する保育実践新評論
- 田尻さやか・西口守 (2013). 保育実践におけるエピソード記述の意義について—学生は何をリアルに描き出そうとしているのか— 東京家政学院大学紀要, 53, 1-21.
- 渡邊眞理・青木聡子 (2018). 幼稚園での現場実習を通じた学生の保育を捉える視点の深まり 初等教育論集, 20, 88-101.

6. 謝 辞

観察にあたりご協力をいただきました幼稚園の方々に御礼申し上げます。また、本稿の執筆にあたりエピソードの提供と掲載に関してご快諾いただいた幼稚園の先生、ならびに学生の皆様に感謝致します。